

枇杷園七部集初編

5
4631
1



門 へ 5
 號 4631
 卷 1

此編より世に傳へられたる代用傳ハ度毎に書とあり
 後乃編つてきたるものなり
 他邦よりおせられたる白紙ハ誤りあり
 ありて先載ありしものありハ一節あり
 毎くそとてけいひあり
 流り變化と此道の事ありハ年席紙
 委小魚とせとしかの年月とありあり
 ありは委一一せず史の人素一強へ

士朗五七集目錄

卷の卷
 蜀書懐紙
 落梅花
 麻
 菊枕集
 於
 松
 礎

五七集目錄

貳の巻

法と真經
山吹集
名かき鳥
花橘集
橋日記
鷲の眼
飛少多鳥
松弦炭
玉之草

五七 目録

三の巻

三日月集
玉笈集
庵犬集
婦皇魚日記
飛波物之縁
閑古鳥
名かき茶

四の巻

陶笛集

穉夜集

字良加

葉子集

飲中八仙歌

長壽樂

三の巻

五の巻

本仇

きく糸

泣瓢集

養虫集

玉兔集

柴の戸集

文化五歌仙

人々の為に玉鳳骨圓を探らん
是れ枝折れしやむらぬらぬら
もやふらむらぬらぬら
海月（折）もあつたる玉書蜂の志れ
厚よもむらぬらぬらぬら

文政八年

尾陽夢光房

志多氏

批七初上二

大徳寺十一

飲中八歌仙と朱樹七十翁賀進
能疎真なるは疎く舟に乗り似たる
あま或と公眼ををり切る可
所利誰辨中を相手ありて
けあしやむらぬらぬら

次中、秋山

手結藤下足踏をしら雲

文政辛未より喜様雀

淡路の松と竹の影をうけて
秋の月と雲の影をうけて
湖の波と風の影をうけて
山の花と鳥の影をうけて

批七初上二

飲中八歌仙

何事にもあきて暮立河	士朗
松八日比の梅のよも	大蘇
蝶とりりのやうな雀の高うりて	五道
翠簾うけりては風のるみ	槎雀
大のりの月あふきたる笛の音	野秀
さくらりと秋葉をとり	餘祥
二股と菊てをうき鹿の角	秋攀
水らむ小僧を後白のひ	素月
妓王寺の堂の傾か	湖凡

自然の子のほく 藪の根を礎
 石老
 夜もさうく 夢をんさく 小書
 珉屋
 消のちりたる 橋の 山書
 蘇
 春鷺のつも 鳥をりやん
 道
 涉橋をさし 桃畑 雨り
 雀
 まるく 悔もたす 雛
 秀
 言ふもた 鼓りり
 祥
 川もふ 飛葉 たる 月の中
 攀
 萩の白ひをこ 風の家
 月
 うそ 夢さき 小袖 夢さむ 夢気
 風
 ゆる 板戸 山 新火

枕七初上三

猫のきり子をさふ 鶯の声の中
 老 弁
 梓あふ 千つつ 夢 満 寺
 屋
 多を 洗ふ 橋を 捨る 也
 蕪
 是の 夢 雨を 可く
 菰
 米五升 十日 雨す 作ら
 雀
 口あさる 夢か 夢さ 夢の 夢
 秀
 おささ 夢さ 夢け 夢の 夢
 祥
 秋を せ 夢さ 夢さ 夢さ
 攀
 宵まき ぬき 大さ 夢さ 夢の 夢
 月
 夢さ 夢さ 夢さ 夢さ 夢さ
 風
 山伏の 夢さ 夢さ 夢さ 夢さ

鳥の身は 望田あふりみらるるて
大いし川の流をそそぐけし
行燈あはれちりかへる義持
印をゆりても かなぬのちをさ
きのふふし 女師の連のあえ人
障子の穴のふくもつるき
梨加も 蜀黍も とも月花ゆ
馬ふが たりひく 禮のつゆ
新ぬき きのふふ草の消る
池をともりふ 井の垣 結くふ
ま川 雲の足 越ふつもふいふ

朗 屋 考 有 齋 明
士 奇 平 朗 屋 秀 有 齋 明

批七初上五

蝶り居とく 鶯の 糸戸をこく
まらぬのふり 跡したる 祖父と波あ
橋をを 新く けぬ 日多を
そこのまは 山 花子の 色ま
人のうらみ 入まゆら てる 輝
をうくと 砂 浜の うく ちを 流
まらぬ 遠の 中を と 出さ け 鯨 鮫
あふり ちり くる 葱の 切く ち
一足の 着 鞋と 腰よ 籠の 坂
峯 吹く 穴 夕月乃 花

屋 朗 齋 有 秀 屋 朗 奇 有 秀 屋

約中もいさうおし角と歌よばり
あちちをよといふ萩の人、ま
虹の根のさうりなり萩の末
半をうらるもも磨るるをり
龍蹄をよとやもたきまら大急
二平り中一にんを磨るる
是福ふそむる花をまは笑も
ふたりの様うおまむすうら

平齋八
士朗七

秀 有 朗 屋 秀 有 奇

批七初上六

眠屋七
野秀七
竹有七
居こほりまて涼き月の影外
ささくらるるやーあはれ
舟うらのやくて安ゆら八重葎
楊山のありのからおろふ
退くみ菜うり芹うり田畑う
うくおすをるるを鳴すおろく

士朗 珉屋 大蘇 五道 屋 朗

十とをふる君の謡の鳥帽る柳
 東のけしきのききくわりら
 浪際又たもひくのみをつじ
 都の事しをひひせやハなす
 かくしと句う付たる望の細
 風ふ吹く浪を波を菓子と
 谷の咲山をさふとち意明く
 千鶴を候ふやうはくはみ
 道 蘓 屋 朗 蘓 道 朗 屋

士朗 九
 珉屋 九

批七款初上八

大蘇 九
 五道 九
 下京や摺袷尔はくあふひ葉
 ちる清のひる涼風秋白月
 幾人も鳩を賞ふ事たりや星
 土着やうぬあとしてハナ
 ちるるちと柳の宮北をち
 蛤うらまをなふもよひこむ
 妻あふ厚あふりさる大井川
 野秀
 大蘓

信濃育のまきくくニ味線
舟の沖う壁をほこふし
聖のまはしし糸髪を結いせり
恵ふ舟の種のはきまをふりあ
橋の枝のさしけり大由ま
船の月うとくしくも鴨の表
舟の舟の種中して波のよせある
舟のこつる舟の種とよ折つ
舟のさるる舟の種もくりせよ
城鳥尔とぬへらせたる恵を
久米路の橋のさくはとのりハ

批七初上九

又、平らり糸貫ふまる小山伏
妻うり笛をほふひい
合歡の末の帳の中より絡緯の声
そはうつらきあつ河の美人
天高く地ち糸歌の玉尺あて
あひくりり画ふとまを張
疎きくは清やしてまてや免み免
舟も糸麻くく糸麻る折り
憂付はむりろの若さをむり
うりまはりふく糸麻る出り
るてはは糸麻る之里あめり

甲斐の初雪の足る枯風
 雲のふた廻らつる若たけこ
 舟を繋ごうとるそふちあし
 雨とき流さるの波目も都
 縁よく掃けハまら葉を
 海苔あつる花の飾屋のひも
 里所さやうふくし一串貝

野秀一
大蘇世五

批七初上十

日ハ初月ハ東の海に林
 稲あく岨り起はさし板
 二人中々すは不の世はねあ
 之かおはまがり難葉の酒
 城をさし暖かな風をさし
 のき初はさしをさし
 喜柳ハ初月をさし
 雪うらむけをさし
 里をさしをさし
 右も左もすし

珉屋
 士朗
 野秀
 大蘇
 五道
 湖風
 槎雀
 素月
 蘓
 秀

狗を棧の下へ捨させす
 百鳥、如所いし、鳥を引きさる
 志くくしと窓の戸をき橋の月
 むうこの汁のほろろ阿き風
 鳥尻をふ出ぬり紙されあひふ
 鏡のそりきり志くくきふやり
 山月とくくハあふきさる池の面
 星を紙敷さすし鞠の小俵
 阿葉陀のききハ鳴るきさの面
 舟中をこくは雲のきさく山
 笠置を紙さくきさる水阿くく

道 風 平奇 籟 大秀 榎間 岳輜 雀 月 道 風

批七初上十一

肥時、月夜の甚い夜、山く
 けり灯乃、あたるの輝むくきさく
 興さ、きく井の底、風呂紙、砂
 入る、きぬ半、小籠、有るを、あふやり
 お、南出、さる、月、共、あ、い、く
 濃柿、小、崎、り、き、さ、る、の、や、く、紙、は
 き、さ、る、の、ふ、き、さ、る、紙、さ、り、り、ふ
 坂、本、ふ、ら、き、さ、る、ふ、ら、き、さ、る、の、友
 牛、流、ふ、ほ、ま、の、流、さ、る、の、き、さ、る
 根、つ、く、を、さ、る、ふ、ら、き、さ、る、の、紙、さ、る
 菟、弱、あ、く、の、海、吞、ふ、く、く

月 雀 輜 大 秀 籟 奇 間 輜 雀 月

批七初上十一

志らるるはそそ成あくまそ茶のそ
 花らるる人を出て中野の落葉掻
 體重しとつひあひりりし
 月津く腸割る小夜阿し
 著て追つる膝しは 蟀
 物新あも志をふ新ふ帰し
 うしきし事しを中し 侍
 探るは消る石新あその部云
 うましきけの拾新あしち
 風通ふあらん波新あし門けら
 柳はくらをう急あしりし 水
 道 朗 蘓 道 朗 蘓 道 朗 蘓 道 朗 蘓

批七初上十三

思ひ持たやう又小鶴も物さく
 師廣新あすき岐阜山の雪
 並新あふ新あさやく動く悲あ
 日あさあつし相りさくます
 名新あをさるあ新あしりさる
 狸を新あさるあ新あしりさる
 ゆる臭き新あ山の新あ新あ
 月新ああさるあしりさる
 あしそささるあ新あ海新あしりさる
 蟻あしそささるあ新あしりさる
 鄭楠あしそささるあ新あしりさる
 道 朗 蘓 道 朗 蘓 道 朗 蘓 道 朗 蘓

批七初上十三

四五兔くりりもつよえとをまうは
 きのふらんく萩の玉川せむき
 朝日影のやを強むる舞あし
 雲の鳴りうとすもそありせある
 人を呼あせあしき乃古和
 二事と六事ふきむとほあは
 清き流きふるうら山形

蘇 道 朗 蘓 道 朗 蘓

士朗 十二
 五道 十二
 大蘇 十二

批七次初上十四

日く終くや木兔の耳は動く時
 去よりきく書のみり出さふり
 魚うらまの入来る門ふれうけて
 疎人三人やる方もある
 なるふ月あそりたる梅の忌
 里路溝川さし柳すす
 わうぬあそる人ふ胡蝶やねう後
 扇のあまふあひあけり
 ちらくと風の灯の動くこ

槎 雀 湖 風 平 夸 大 蘓 士 朗 野 秀 風 雀 蘇

舟の淡路亦わける　むしる
 抱いぬ娘うきうぐのれとあきて
 今朝のいのちふ鳥籠う出る
 月海て又一ト志きり鳴りあき
 阿しき此きをうくふくきく
 山駕霧ふ若れ恨を忘きたり
 篠折うけけし水乃の心海ふ
 ぐあも又花唇をうこうさす
 夢のまきふありく　夜代
 身を捨る雨を差裁ふてきて
 大悲能給るを強むぬの日

齋　秀　朗　雀　風　齋　蘇　素月　秀　風　雀

批七初上十五

紫陽花　手阿ちかきすの墓の面
 丸く抱れくくる急死すしし
 士持子の自爆する後の味
 中遊りさしりいふ此夕晴
 本枯亦吹すくさきてあきる雀
 ちりく　霧の垣根うくく
 雞面も砂よきめくは陸吉
 泪小ぬきる眼しし乃抱
 傾城おむりしを記し朝月
 泣きしものさふあきる　烟
 山々ひき粒のきき若妻も刈り鏡

蕪　奇　珉屋　月　秀　風　雀　蕪　奇　屋　月

十日あけのしるゝ家乃日のと
鶏を連るしるの居る鉢なき
そら飯のぬき鴨川の水
此のまのふみあはれと記はる
そらくさきまのあはれと記はる

秀 風 雀 蕪 奇

槎 雀 六

湖 風 六

平 齋 六

大 蘇 六

士 朗 二

批七初上十六

菴新新のふもつて彦とつて
あうらうらうらと書新はくは
帆むしるふ足する磯の山名を
波の中あも目をふくそくり
大勢の根末ほりふ出の朝の月
何くるふやう白くそ新 杖
先の子をお撲丸ふしてつぎあ
犬の足ふむ新 主の 庭
摺るふれをふ咲みたるそく

湖 風 槎 雀 五 道 素 月 風 雀 道 月 庭 風

明やよき春や露のきぬく
うるゆもきふたしあむ黄巾
季のゆくもは花もむらん
顔のうく水の流をんふも
川の臭きすんらうをさ
小娘は若をうたつ夕
春返のふる中よ月代
おきやてはやしこぬき
あやの唇はさかづか
ひとくと汐もちつる舟の底
春石ひとらちうく

雀月道雀風月道雀風月道雀

批七歌初上十七

挑灯をくけあたる朝の下
猿よりおふアんのおも
菅笠よ林の枝をまき
のつるくよ移をす
木うくくのふいぬの
みそく使の影ふ
雲をさくし出る松の
きちく色の跡る
秋風よ恨のひや
月夜う泣く月
横笛よ何となく

雀風月道雀風月道雀

むしあたるめい院くのうしぬ
きしと誰う増賀の裸身を
あしあまなり伊勢の川ぬ
杖ハ軽し不衝不崩山ささる
巢尔鳴り名も数のおうくひ

月 雀 月 雀

湖 風 九

槎 雀 九

素 月 九

五 道 九

批七初上十八

大ま小隈をきき露の敷う菊
手の皺をさするききの音は
きき常ふりきたる菊のほし山
清澄をふるき出さる雛の志
まきぬの中し月後や朝の山
押よをそねと菊はく九月
おろふしハを後を出さる初澄山
梅の葉のあし先をきき山路
ささるしや白きものま栗の茶

士朗 桂五 岳輅 夕汝 竹有 大阜 圃曉 徐英 石老

夕暮と暮引まじりてありて
あつ山の雲は口をこくと山はくく
杉林や人あもすくも子の蔓
松風やゆらぐたふしたる冬の月
むらあめり枝とていなり暮るふ
りけうちあふをやまらる春の海
草脚や一はくもつたはくく
飯阿ふひくくも居るは松のふ
まの林は松のまふ落る水屋に
志くくや誰り結ひくく飛簾
旅人とのの物束の神たき

帯模 梅間 硯静 葛井 大蕪 鹿野 五雄 沙鷗 黄山 秋国 栗大

批七初上十九

藪寺や鳩の糞うる年の暮
鶯ふ撥くく見やうをまうつを
り林のふりけはゆや雨あや
ゆら林巾滝ゆりとの朝はく
新をくまよとくや月の満たひよ
年冷ひよよせきてあそと忘
正月も二日くくは八月と梅
う免る菜を穂の背太の丸に
る松梅志くくあもぬきあがり
朝妻のせうをほき鳩のふ
うくひよやをりやまらる梅のふ

應江 麥阿 葛奇 九岳 大商 吐山 湖風 槎雀 柏亭 妻月尾 雀人

名月の出しはや萩のそよきま
水のふふ又方のうへふふの月
舟をまてゐるやむの女郎花
やましくとあて仕合し花うか
るはくくはさくまのまのぬ
ふさうりさあよりおはたりり
人まの中ふもさくく葉のふ
秋の末のまをを藤の鳴き
美川の橋うらわらし秋の風
けり秋や種もりさうぬ ぼん ちか
塩釜をこ嵐のまをるあらしうか

千阿 尺艾 鶯亭 李東 道彦 榎堂 来紀 介亭 曉浦 省我 岱呂

枕七級初上世三

木くくくや此夕くさくハ汐も来は
落葉ふちぬ本も一本阿りまの菴
けりまもあの小葉をぬゆ本ま
竹まのさふさりたる河原ふ
ふけの月あくくは水もた
ぬ風や名も浮や株の旅のち白
不ぬ来り人もさくむや畑さ
まよららまうりやさくさく飛
葉根くくやことハんえぬまのま
背くけりさく居のまをさくま
冬くまや山よまのつはくく人のうら

翠川 砂文 関豊 葛三 喜年 雀鳴 桐栢 蕉雨 春蟻 月居 音梁

松竹やまろく梅影正月よ
 東有
 鶯ハ竹は啼りける福島の二鳥
 怡亭
 松ふるまゝあたつ福のまゝ也け
 良平
 くらふと来ては仙生をぬちもそ
 琴州
 鳥の来く福文月ハ大事
 雄途
 船りけと月夜の宿を忘るまゝ
 月巢
 ぬれ日ハ鶯も柳も眠りたる
 宇曲

深草の影おのハ遊をつ不欠く小舟の遊り
 先杯をやりつ入るまゝハ舟の底より

枕七歌初廿四

月あけをさそはふらんと平島に春り
 桜鼓を望山月乃春を先くまハ
 山と尔春るまゝいおふまつらん
 いふやろく舟を一森樹のそとに
 春あふれをまき一舟の酒を捧ぐ
 志人なれなすものふハ桃は春ふあふ
 春鶯飛すそはあけ入つ鶯りて

翠毫をくぐり 撫をらさるるまよハ
かんとり 歌白之山ハや 芭らん 道
菜ハやハ ぬれ 舞

赤岨珉屋書

野秀
平齋
撰
五道

批七初上廿五

宇羅加良次集

青柳 枝少 菊 了 たる あり ことし
をりく 微風 小 おも ち けり けり
とハ 糸 綴 白 の まり けり けり 附合 題
前 月 中 柳 小 枝 の 聲 響 ふり あり せし
竹 枝 を ぬり けり けり 琴 奏 けり けり
ま けり けり けり けり けり けり けり けり

月 集

教ふを所へ 亭り心裏の
花 去 山 終 月 暮 也

士朗

批七初上世六

浦 波 浪 多 所 心
 冬 朝 日 浪 多 所 心
 大 釜 飯 泡 多 所 心
 破 磨 石 瓦 多 所 心
 ほ ろ ぐ と 梅 梢 月
 岩 を 石 長 亀 和 中
 塗 下 結 を 浜 の 崎
 大 石 の 人 を 石 崎
 古 老 の 何 を 崎 之 山

士朗 亭 朗 亭 朗 亭 朗

童子強子ハ種トヨクサメ
 摺袂のくふのくきも言うり
 ひくりにんあ出る白草の月
 折くハ麻返ふ草の衣よ
 玉露のサ新換弁ハ笑ハ經
 けふるりの囁けらうハ松の風
 海風ふくくきりあふる新
 くるくくとふくきを社よき
 董うきし門とをりりり
 五六本なる屋ハ柳喜きたる
 傾より西きのの膳をわしより
 朗 亭 朗 亭 朗 亭 朗 亭 朗 亭 朗

批七初七七

ぬき推るの表ハ木也ハとる
 牡丹よふくきハ新
 外屋あひひりくハ門人
 上鳥の輪をうけり魚賣
 足輕の茶搗よ出る四ツ日
 拾まぬふ急以候ハ一ハ
 年トをわ春をこふハの
 糸巻くもりの計かををり
 松芦の中ハ母衣をゆり
 系おとらハと舞ハる
 順礼の旅立あくる猫の
 亭 朗 亭 朗 亭 朗 亭 朗 亭 朗 亭 朗

朝下川へ丸木うちをり
 ちこくと極んで来る雲母砂
 おもき摘日や年又らうか
 月見えり星の料理を花の足
 ちりあけて鳴り終りの堂
 亭 朗 举 亭

四季混雜

夏うらやばくや鶴も雪のるる
 道彦

批七初花八

堂の雪又入さる垣のうま
 不二筑波の妙てえり星を
 若人の宿とりつらん秋の雪
 つくろひもるるそそ雪笑る外
 見歩り八人のささるいありりり
 きらくくと浪音を月の御分
 堂の若うも花の小家うま
 草鞋をく目先をうがり括尾を
 お月あやとくくとあの高草
 夕立や今うつうき峰の月
 稲妻あやるよ花つと
 暮 花
 宇洋 桐居 鹿野 柯亭 可都里 長秋 馮月 不卜 徳呂 采美 花明

大うこの月も色づり秋の水
 門よりれハ花よ志のちうこまを
 山とまうほむやうこ後の月
 燈とくぬあまもまうハ梅の花
 清澄や平野のくまの春の水
 引よまを梅よせまやまの山
 秋の月梅をうまうまのそほし
 押多く流るんをまう梅うま
 中うくくまの四月のうまうま
 梅折何の苦もあま梅はけ
 咲出すと月まもまのうま梅うま

俳六
 成美
 秀峰
 茂良
 九岳
 翠川
 木常
 蒼丸
 嵐外
 桂五

物七初上苑

その中をまうまうまうま
 門のあまあまうまうま梅う
 人ま、まうまうまうま
 五月あまうまうまあまの海
 七夕よりあまうまうま梅う
 秋の秋のたうまうまうまの月
 夕照や野のうまうま秋の山
 隣うまうまや梅よ花ひまう
 人の子の袴うまうま梅うまの
 花はま梅まのうまうま梅う
 末うまうまうま梅の中やまうま

野秀
 梅堂
 棋間
 梅夫
 花叙
 卧央
 雪雄
 卓池
 秀峰
 甫且
 得芝

鳥をさしつに雀も追り出も禁に
月小鳴り鳥の影よ跡たぐき
山城ハ山を屏風よ 帰り花
菴の言へ付もり人も事
山さとの宿をへるるり鳥の鳴
人のまめ月の為をり伏さぬ
名月のやとりまをん志をのね
栞屏花我腮のはつうき
海山ハ鳥く名月の雪下 うけよ
鳥鳴りて葉の下へ扇る 羽うか
山藪中是くけ咲ハ何くろ

五雄
葛井
関叟
竹有
梅洲
和乐
佳雄
諶六
黄山
菊香
麦老

枕七初上三

廉更さるる海鳥も旅の鳥
山も前更もいさ付さぬおま
子雀ハ何を捨てる秋の花
山王ハ正月をさるるうめの花
久かた平夜雪のまもをる栞の花
杉林も何りく雪降小庭に
朝負ハひさしくの縁うか
名月やるを根さるるけも七系
風吹ハ鳴るるあさるる総の鳥
秋風の葉をさるる守何くし
きりくは青の心ハあうりやう

仙風
元美
波多摩
方明
素月
怡亭
如月
栞堂
葛三
伯先
鸞岡

あけほのくちもより上よものもほ
あぬ花の卯は塵すきこ小庭か
まろまろりのまろを待や女ら卯花
まほろをもちろ又眺ろいと波引
大名の鳥を並つろほろんろ分
あぬせはとまろ又喰ぬせりせぬ
あよあゆくあけほのつろろ二月か
人並のつを指ろりろさの 音
まのりろ杉よころろまの月
ほろろく城よまろろり杉のろれ
山吹ハ一年をすまともハ 音 藤

虎杖 有磯 何頼 粗亮 千阿 素繁 汝策 桐屏 可雪 月庭 介亭

批七劫初上冊一

あけほのくちもより上よものもほ
あぬ花の卯は塵すきこ小庭か
まろまろりのまろを待や女ら卯花
まほろをもちろ又眺ろいと波引
大名の鳥を並つろほろんろ分
あぬせはとまろ又喰ぬせりせぬ
あよあゆくあけほのつろろ二月か
人並のつを指ろりろさの 音
まのりろ杉よころろまの月
ほろろく城よまろろり杉のろれ
山吹ハ一年をすまともハ 音 藤

阿夷 柳莊 希言 雲帯 如毛 里三 孝童 三都良 左誥 秋峯 梅香都

秋風や青きくもさぬ山の奥
必やさつらつらんなきるもの休
お梅のちりりかりりり雛の髪
扇をもて苔の毛ゆる夕
多きやちのひらたら苔の裏
我ちお人の来よふ梅の毛
涼しさを万菊とのく野の暑
時多しとくまきくまの袖味系
袖雪や誰やうきる芝草のすく
をくもるお母を流すりきこ
らふの目も入ぬお梅の水溜り

大蘓
吞鳥
月巢
雄途
永彦
沙鷗
蕉雨
少汝
岳輅
介亭
士朗

一七七初上三

介亭
休よ雀をきていけよ学うを
埋火つららみ月夜ののうき
二重海を山のとくくぬれて
をうき木のこちりりふりり
常おれをみひらくとする初月夜
髯の笛よつらとく出す
恙せられ一き方のふ葉のうてぬ
庭子の朝顔そちあまひをる

介亭
士朗
岳輅
亭
朗
格
朗
亭
朗

人つらいつうひるそ答答の亭
芦の穂のちる門のうら嵐
乞食よ志けいひるは財よら
精を落く氣やまうや
矢田の甲の牡丹の月を足あ
寒ききぬたはくの中
幣や焦ん茶釜の下のきり
まゝの終り 鶴う 鳴
初冬の二日ハ毎本間よ
人まの隙のや大根を 堀
几中提て出れハ風り起るこ

格 亭 朗 格 亭 朗 格 亭 朗 格 亭 朗 格

批七於初上世三

雪をくすす武庫の白雲
西向てゆき佛よ宿くむ
松の木下よりける 結 差
四五輪の牡丹岩を流出
かゝの智恵をかりる初冬
燐の昼ハ消つ火をよ
そのをものぬ息をえふ
早乃月のとやうき
後水く抱ひよりく身現
る時春うく鳴る春く

朗 格 亭 朗 格 亭 朗 格 亭 朗 格

虎毛をり木のさへつゝ垣の内
 鎖の結たる苔の一ツ井
 夕暮ハ燈よむせらゆりまて
 田螺汁多く納米をす
 山橋あけらゆはれそこのそを
 宿の七差の董毛

亭 朗 格 朗 亭
 宿

文化六年己九月

批七初上冊四

山吹集

墨田川の流あゝやうき
 古きしきふかきやうきふかき
 新うきしきふかきやうきふかき
 側借新小堤くわりのあけ
 ありしきふかきやうきふかき
 豊前のかみふかきやうきふかき
 朱樹叟の方より血きき
 点卯よきふかきやうきふかき
 来るおをふかきやうきふかき
 満ちつゝつゝつゝ

山吹集

古里中て小舟ゆき
を船に寄るをうるを
寄るゆゑの免るを
事成ると人こゝろよる
喜乃日有りあはる花の影
楓の影あふるをうるを
みやぬははらと障
誰うは蓋うるをうるを
侍るへき花寄るをうるを
うりもくをうるを
寄るは花ひとるをうるを

枕七初上世五

よむとくを絶たるあはれ
を色人そあはれ来りけ
あはれこのま
そらあはれをうるを
あはれ引あはれを
あはれうるを
あはれひてをうるを
いけすあはれをうるを
白面時菊の福あはれ
あはれをうるを
あはれをうるを

有りてりしはさるの竹
 雨の集ありふまきと
 若つくまきしきいま
 をしらすか
 みちのたれ
 寛政うまの

批七初毒六

山崎集

松ゆきしひと木をくえ山嵐ふ

朱國豊
士朗

四時

まゝあしあきのしき、梅をり危

床のぼりまて涼しき月のまは

鴨をのりかたしきふとの雪のや

南雪月夜自りまきしこれ新

右

あふと我このふとよ水魚のちを
 をむすふと師恩の涼きよりを

花さかりなる今や尾陽の朱樹豊まき
 ふりたてししとや言ふ 僕又同じ
 ことはいまもいとくへ鳥語を送られ
 けり 秋沙うらひ我も又むかへ
 夏草や中選秋もいとむらり我
 ちを鳥柳はまきうさりしりり
 二日のおとくこころのわらぬのふ
 つのやまきこころのまよひ程も
 花すききとりてうらたきう
 ちよと
 名も月やうらとねるかこまこ

洛 嵐月
 百池
 其成
 月居
 丈左
 旧國

批七初上冊七

花のそき様よまの山崎
 雲の小蝶の風情よかたれくも
 花の梅もむすふををを
 畑うらをを鶴の肝よりあつたを
 さうののうらをを様は鳴ぬ
 目くらかたをよのよのよ
 といむつたをうらむしそ
 うらばをのなりとそ士離の
 もとむらり 花押の
 ありをよまを
 人は今早月の鏡経うらむ

長み
 妹六
 魚隠
 凡十
 文雅
 東武
 午心

まる物や多葉の武士の袴の形
 五明
 月波にかりき砂子もうとむじ
 蛙眼
 朝の玉糸や磯帯しりしけしつるまこと
 汀砂
 丁くしとつゆかき木りうふ
 布席
 草は秋や日木のうらふ隣りなる
 も木
 雪やけのくすりとつなやまき葉掃
 杖支
 飾たつきけ世のおしをほをたり
 漬く
 をしむしきまもほ生のなるりか
 如帛
 まあそこの雪移ふそくなきに花子が
 白羽
 一一く春は水の危よりあふかり
 柳荘
 樹もまもやりし藤はまも色星の朝
 方
 五竹

一 靴七初上冊九

夏あとの薄雲なるも秋の 忌
 可都重
 大空は月よみぬ秋さうくく
 蕉雨
 う〜稻や小うく〜
 下総 塘雨
 鳴り蛙をきりし煙はるうりや
 伏見 吟九
 ふを果るやいけう〜
 空月
 う九も飛むのや〜ふゆり毛比が
 梅俣
 沿み舞う〜降け〜光をせまのぬ
 筑前 石園
 菊子の白ひをぬ〜
 け糸
 春林や〜
 可十
 木〜〜や只〜
 サツ 愛奥
 春の宿のた〜
 赤子 花休

端岸のまらくふはるるををふ

と 綺石

くまひ松北室を先生は

風を吹送るくまのくまを

孝子中のとくふ松ふ松菴の

ゆきくま千重福歩のふが

いと先

うきやをいづ地をふまは子親

赤犬の常山花の中は咲く哉

屋浪

ちまはく我を友にけくを山さく

湖ははく是くけくはるの地

燈ともを六将をまわれり川を

まをく平のうき世帯人言のま

藤くくはくの中をりおはあり

梅ひく木をちく幸くもくをり

海のうらひ雲もやくまをき

人のく歌のくまのりつは梅のふ

お月面の夜はまらくまを明はる

とち花やけけくをまき砂のく

煙なく垣は葉の葉の葉く南

の月月の塔くま夏とすりま

梅はくく雲のくまを遠く

屋松

少汝

李臺

松兄

張表

燕武

青龍

外央

岱青

杜石

作方

批七初上甲

桂五

岳格

手厚

君平

ふり向くふねははりの花より

曙雀

ねあ〜〜

長き日やひらくものに風の葉

夏夕

思ふ夜の宿をばよりまきの月

南明

小倉の郎

世の中の子をば集めて浮葉の

桃李菴

蛸やりの心の花は遠きうら

箕遊

ひろうほやよ〜〜〜ゆき子

指雪

遊れたる昔留の紙や風の香

櫻明

我ものよ〜〜〜〜〜の遠きうら

杜康

子〜〜〜の遠き〜〜〜〜〜

洗字

批七初上二

河豚け 母はす〜〜〜〜〜

穆令

おもしろ月夜お〜〜〜〜〜

我凌

霧の氷を〜〜〜〜〜

砵と

花のまを冠は 瑞を〜〜〜

穆如

唯ちの園相は 光を〜〜〜

蛸子

孫らん 像をば 杖〜〜〜

水球

書をと〜〜〜 ち草 一本 高をば

九鼻

笑ふの書は 戸をば 押や〜〜

其々

年中のやをば さいま〜〜

百慶

るをりつ〜〜 ちの和や 梅の電

味文

常ふ 徳をば せ〜〜 常〜〜

蜂巢

夏紙てあ子とゆつし 登りうま

北濱

水の池も岸の松もさうさう

心水

空の空とあつたをり 花のさき

風篁

春のさきと 葉のまののさうと ぬい

笔利

書物よびとむしる 雨のやううな

文荷

おねひ 我れ 神よ 夏の 月

東園

かきまののつれまをり ちか

石江

ともし火の執りまをり ちか

柳亭

金筆をまをりまをり ちか 柳の風

窺亭

晴軒や 静の浪の上を ちか

一草

拙七初上里

春の池も 岸の松も さうさう

涼雲

空の空と あつたをり 花のさき

起凡

春のさきと 葉のまののさうと ぬい

偶中

書物よびと むしる 雨のやううな

徐行

おねひ 我れ 神よ 夏の 月

梨雪

かきまのの つれまをり ちか

仙施

ともし火の 執りまをり ちか

市雀

金筆を まをり まをり ちか 柳の風

杜良

晴軒や 静の浪の上を ちか

調二

春のさきと 葉のまののさうと ぬい

百頂

書物よびと むしる 雨のやううな

芦舟

てふくの産産をてりりわが
稲妻あやあまひの木のよと
中一き織屋なるく産く其ふ
遠言るく井の子ほめくをり
七子のあまひふ世を産を心
中出くを産よももるの心
おの花の産く産うつに産
きのふより梅の日や産たり
我友の産を産く産の産
産産の産の産く産く井川
朝夕の月よ産たり産心

有芳
里洞
其柳
崇桂
一溪
志流
芝土
路長
巴丈
遠水
千村

批七初上甲四

ふ梅小産の産の産りうの
けり産子の産く産
松の産をいつく産く産
風産あまひ産り産年
四時
正月の産く産その産る産
あつくと産産を産く産
朝う産の産よ産ひな産り
あまひより産産を産の産

若

了ふ

意部
紫基

牛後
素人

あを

禁下のまららぬゆゑよつうきさ
たあし雲井の月よあふさしををふ
誰かをたけしうる申すしきさ
ふらき琴はをるう玉のぬし
やうし風雅を練磨する
友をりきりの程は及ぶし
ふれひとくあしきよ腰を

龍七初上四

あゝえゆやうきよ手紙
既よ命ふのつ詠ふをん
よそののかり判しあのほどを
あゝえしきよあそ彼
月よあふさしををふ
今しのまふあしを
能風の正しきをあし
とらして小冊とす風雅の

新—ふも—き—し—草—歎—情
名をたふる慈よむきひてん
し—の—こ—ら—も—を—汲—く—揚—衣
唐のつらき—愛よ—昔—を—た—さ—
むるをり

寛政十の

戊午の書



批七於初上甲大

書の眼集

秋の風は物をもすむ守るあり
よるく—うは—の—月—の—出—部
後白小隠ふ影の住りこ—
た—あ—う—の—い—れ—く—ち—や—む—淋—く—は—
才之の轉ま—く—き—る—く—し—お—ろ—ま—の—
よき—の—あ—い—れ—く—は—の—あ—い—の—
る—う—の—あ—い—れ—く—は—の—あ—い—の—
あ—い—の—あ—い—れ—く—は—の—あ—い—の—

岳 輅

士 朗

岱 青

羅 城

くろふと手世附肌又不可説の妙や
蝶や舞て侍従此もやねむらん

一巻を閲するふは第一句始て俳諧の

真を託はけ附近さうらふも遠るも一

やんかゝる場ふあふへうらほ

をふりけ込るこころきの月

は白の侍も遠く茶臼の西へあふ

く罪不浄

一海まると茶畑みまうらまはひ

神漱うらまえて寝るを川一張

ささめ今こころとふるをこころ物也

朗

輅

青 城

批七教初上甲八

たをいへる海の町をうらまはひ

このたをいへる一巻の調子とてあけず

このうらまはひはあふ又あやむれ

たをいへる字をうらまはひはあふ

東雀のうらまはひをうらまはひはあふ

うらまはひはあふはあふはあふ

をいへるあふはあふはあふはあふ

名をうらまはひはあふはあふはあふ

うらまはひはあふはあふはあふ

あふはあふはあふはあふはあふ

うらまはひはあふはあふはあふ

輅

朗

青

城

輅

朗

青

城

輅

朗

輅

今の間小首言掃入女子の花
 朝日の中目を輝く心伊勢島
 げ返る白雲のまきりゆく法と
 調として染みよるるるるるるる
 何人か思ひつゝしてささるる
 鬼女の面をおくすうろも
 古湯衣縁の影ふり忘らぬ
 香の羽もけつ杜の松
 指の香をすましく月の光
 白雲のまきりゆく法と

城 青 朗 城 青 朗 城 青 朗 城 青 朗

此七初上四九

白雲のまきりゆく法と
 調として染みよるるるるるるる
 何人か思ひつゝしてささるる
 鬼女の面をおくすうろも
 古湯衣縁の影ふり忘らぬ
 香の羽もけつ杜の松
 指の香をすましく月の光
 白雲のまきりゆく法と

城 青 朗 城 青 朗 城 青 朗 城 青 朗

花の領横筋くひる水戸をまて
書

又表をせり

揚るふけりの糸又ねへる
城

あーきとよむとよと糸の二白の
青

肩をたれは花のあしりの深しん本
青

前やうめふらうくもをしんも
青

一とよも
青

秋風や人やうをぬ縁くもも
青

ありたは月月の流るる白萩
羅城

とよふゆららむる眼をり
羅城

批七初上辛

なしくいふは流るるくんアうもよ
岳路

とよ月と糸の糸とすう玉をま
岳路

けきては白雲かぬ人あ小サカ
岳路

のうふらうくは流るるやうん
岳路

珠たけ流るる川の流るるま
士朗

滝すうとのわたりまわらひよと
士朗

たれともま流るるまのまのま
士朗

まのまのまのまのまのま
士朗

滝の流るるまのまのまのま
白圖

ある月をまのまのまのまのま
白圖

解もありたるまのまのまのま
白圖

あふふこはきて自らするよ

紀鳳

漁翁と言ふらひしとらんよ

白園

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

あふふこはきてあふふこはきて

批七於初上辛一

桂五
青城

輅朗圖

鳳

いしをあたしを鶴の音の鳴る 鐘

玉

ゆふあまの道等うふ及の白ををんる

惟人の始く不念の懼可伏

吹くうた梅をよみあまを帰る

伴をうつはすあまのしるは花

多恋ふをよ山を引けつる

いしをのふ白の連綿をよんる

冥路喜み涙をそく

かろくそくたるめをのく人

魚喃二日ふこころをね流川

すまふをよみあまの勝りけ

朗 圖 鳳

批七初上廿三

雨晴の門をくふらち出つら

あはれをよみあまのしるは

年く小あんをん殺つら流川日

いしをよみあまのしるは

昔ふあふのふあまのしるは

あまをよみあまのしるは

あまのしるは

あま

山をよみあまのしるは

あまのしるは

あまのしるは

城 輅 朗

青 五

其角宛

このわくひももろくまりの母

翁宛

二ツ之川 龍引はむ子の母

静人宛

きれくもるの木のけろふ

妻や子もさるの山居ありとす

ひらり

龍をゆりては志ある龍帯

別堂一き

雪ふりくもるふりくと降出

圖

鳳

五

青

城

轆

枕七初上辛三

深川

むく隣 山境中軍を築く

阿多村を信正の力をやつされて

阿のまよしおの改えの年

こまやりのありさ城変す君をせり

吾もやりのいよふ又何をうきうん且

弟をふまさる事しけり

来てんまは今を移すあ

志をふふしけり

いさくのあやを移すあ

りりりたるあや今人の能なり

朗

圖

鳳

五

きやぬうきん蓋りつりたるはらちん
ととあふりてん

みよのんもるくして是すてのいよく
運ひゆんおんなん様もあつ

かききいさる西ひり月り
あつてふらとて又すきりあつ

井見道考う詩

あきま
あきま
あきま

輅

批七初五十四

之わくら流のうらもよ雜子のろ
月まのほむお岸杖ををる
藻汐禁く岸の梅のちりこして
をたぬておをいある家の戸
あ二日曇るお領とやあぬらん
おほひげたうき夏はあふなり
世おをまき障をよ琵琶をすあや
ぬぬうらあやあをささあ
あふりまふりよりおを思ひあ
半畑補おりきあをほむ
おらねの月の夕浪おあ

岳輅
白圖
紀鳳
士明
圖
輅
朗
鳳
輅
圖
鳳

富りかゝるも建ハるもはまぬ
武士の名もしゝまゝに秋の風
手箱を細みおとのか解し
おのの後の小うかふとの間ん
あつきのゆるき鶴のあふす
ふりやうの神は化装ひの毛さむく
二月運ふ瓜ははけさの
さましゝもももあぬをなまの氷
新なまきもあまのほろろ中
いづりあゝる恋のせきさゝり

朗 圖 輅 朗 鳳 圖 輅 朗 鳳 圖 輅 朗 鳳 圖 輅

批七初正五五

あゝ秋のそとにすまのそと
さゝるもあゝるもあゝるも
つゝまのそととあゝるもあゝるも
七文のそととあゝるもあゝるも
是まのそととあゝるもあゝるも
萩のそととあゝるもあゝるも
梅のそととあゝるもあゝるも
馬のそととあゝるもあゝるも
浅はのそととあゝるもあゝるも
魚のそととあゝるもあゝるも
魚のそととあゝるもあゝるも

圖 輅 朗 鳳 圖 輅 朗 鳳 圖 輅 朗 鳳 圖 輅

俳諧の正風を尋り尾張の玉又吹起わて
 冬々の目形五款仙米ぬそ枯かき芭蕉の篇
 鏡亭一たる他人物ささへ哀尔おほきぬ
 とて身を亦くく一尔風程一て都一鄙
 をりくくのゆりノ尔きりあはれ又暮り
 たまへり其ころ舞田小借ておひきり
 袂路の土に破きたるを差遣志のよん然
 ずし尔生ひあをそ申く尔おも交よりも
 んしとすりたるやさしきりかそ然くせら
 磨雪は鏡小造管をよらうしひあ語唱と

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

此七於初上季也
 早圖

人の心や依屋の御不飯寐せらむとて我
海鳥の轡をたふさむく子鳥の鳴り星夜の
やまふ心をよせく笠を懸くくくくく
もききなりくくくもはやとせきあり
代々く小田新水ととり又親き人のなつと
粟稗のたくれ菜子菴を尋ね入刈田の
鴨子法架をたぬふく帰るせく
夕暮ふはあり少あちたふふも似て古
月をたつてさきさきくくくも時ある
春をうけりむ或日書林風月堂やま
あもやさくくく覚えく志りくくく

概七初下

休らふ不世よ雪をたふり出くくくハ
いさ出ん雪見ふくくく所や
丁卯臘月すくめ夕暮何果よ送るせ
真一玉くくくくく
真一玉くくくくく
いさくくくくく
其句お古きをといひよ世ハさ家の久後も
又めくたたり不肖士朗百季のそと
とふらひもくくくくの白くくくく
あう胸をさす豊よりくくくく
おちくくくくくくくくくく

何の幸ひを名吾やの事云を名させしや
そ師も今うはすくをり玉ひぬるあわを
風月堂中ふ序を後々て人くを舎へ
せも尔翁の美談み終極くあふら
まきの後を次く

(Faint bleed-through text from the reverse side)

世七於初下二

麻刈集

雪之卷

いほららハ雪見ふころふあきて
百季はむきまののすす
遠むらあ小纏いら皆裂らん
又さし出たき彩の燃えさ
山吹のあをを糸入りりあ
雪子貞をくえらるるあり
桶の底かくりとぬたて雲のあ
あうまきある日す降りり
信貞ー伊賀の石切本逃ー

士朗
暁臺
朗
臺
朗
臺
朗
臺

是をくハとて死田を破る
 孰も能くも井をくくも下居つ
 けふも焼く場も多し
 ひもくくと井をくくも月代尔
 貝を櫃にかけりる所も風
 本質の温泉に福り別る
 刀賣る人尔出向ふも
 破る泥障を師矣よ爰
 妻のそそ一時約あつ
 せきたり子き戸ひく推百と

朗 臺 朗 臺 朗 臺 朗 臺 朗 臺

一 批七終初下三

伊能く免くくもあまの
 梅をくくくく河の
 潮をくくくく河の
 垣より出る水のちりく
 光はに物を玉りくとあまの
 玉を下向のちりき
 又を松母を極と有りめ
 浮世の多き風を送り火
 香る夜の月を波より
 福す勢玉へ厚
 鏡て子に家つもなき

朗 臺 萬岱 羅城 岳輅 問毛 岱青 蘭水 卧央 彪門 紀鳳

月の盲るまて歌く日本紀

朗

鏡花むらぬまの戸海山あつ

城

まをふまぬ人まてハナ

青

本のりふけも鏡もさくハ

島拜吟

蛇の鳴日多今も長栄こ

白図

書のり 冬を降る日

枇杷園ふま砂

書もてる雲の鹿元ちうを

曉臺

梅一葉お初書すてハナたハナ

帯梅

枇杷七於初下四

茶室の鏡古を足めくりもつら

木吉

人々の暮居ハいまこニツカ一ツ

白雲

未もたすす居くすりありあ

木入

梅く茶室のり

秋雲の舞ふるまろ板戸哉

士朗

茶室

枝炭小見おハツツの落言あ

城室

落言やまの白菊おあ

梅吳

白雪をわらそのふをハナ

聊于

多鳴と舞り松の言落言

杜常

けくハナあもハナ香の山

琴波

赤良坂や麻の尾小見らるるさの香
衣を着は濃紫よけはれを
ぬくくしやるる小麻るる寸葉を
問毛

書懐

片小老のつもるはらりりよの香
降るる香はるるのふゆりぬきまは
人のけり方りりりり風の香
白圖
文陵
騏六

兩尾山よる

衣ねの香とらるる香一風情哉
はくくくと香のふるるる一詠免る
深くやしきの香ふるるる此由まき
多木人
信スハ
自徳
木吾

批七初下五

呼喚松風の里をるる

香小出て屋の香とるる梅りりり
萩の香り満ちまきこ香よまきりりり
香のやまきまきや月ありのまきに
香の日やんほく香まきものもあ
羅城

風之香

ふくくくく香をるる香よ似たる
香よ志とつる香のよはれ月
砧うつ遠山よるの香くまきて
白圖
士朗

魚依漕舟をうけてなり
夷おそ古き風情やのるらん
橋をとつぬ人としてハナ

徐英

圖

朗

登八事山

木くくくく佛の魚の志つくや
あくくくく隣のりき日暮ハ
用や刃を木くく山のさくくき
くくくく山又山のくくくく
木のつて木くくくくく
木くくくくくくくくくく

岳輅

卧央

吟幸

古常

啟甫

騏道

批七於初ノ下六

風よ藤葉を吹く破戸外

五周

くくくくのつめて又のりた外

益青

小庵豆菴のちのくく岸高く梅を

士取

土橋をくくくくくくくく

士取

木くくくくくくくくく

白圖

平系みや

木くくくくく小町く死て幾世あ
木くくくくくや海一をよ出る月
くくくくくくくくくくくく
風や夕山名のくくくく
くくくくくくくくくくく

趙鳧

士朗

入素

卓池

曉基

木曾山中

序々や日も本々くー 影はあかり
本々くーや後架ふも神のつとむり
こくくもや鳥のこくくの月を

桂五
羅城
丹戎

夕暮のまじき

星のまじのまじきをよとやあくるも
附るの中よある之日月
小腕を撓すまじのうけ
人のとくよこくねよ應る
くくは伊賀うらうらつとても

岳輅
士朗
吳井
輅

批七初下七

まじき ぬをかさる 結 中々

井

ゆきむらひて

まじき やまのまじき ぬかす ぬかす
伊勢の海士のまじきをぬかす

万盛
目央

送茶

まじき ぬかす ぬかす ぬかす
加茂川や水一鳴り小ねまじき

木入
間毛
芦涯

醉起步溪月

まじき ぬかす ぬかす ぬかす
目の覚えて見まは寺も川 千鳥
かハくくもまじきも鳴りまじき

妻外
巨川

いそ子もあやむらぎのふさふさ

京 桃睡

湖色

古きや移る島もあやふさふさ

羅城

夕子も海をまきあやふさふさ

雨滴

萩りしりの沖に小楫もあやふさふさ

素兄

磯ちとり沖のふさふさへかりり

木人

浪のともむしりもあやふさふさ

安之

むさねいあふさふさあやふさふさ

風止

三のふて

中海風千に神宮もあやふさふさ

士朗

あや嶺に上小島むしりあやふさふさ

批七初下八

見送り

夕言松風のけりあやふさふさ

曉臺

むしりあやふさふさあやふさふさ

李臺

あやふさふさあやふさふさあやふさふさ

岳輅

むしりあやふさふさあやふさふさ

岱音

鴨の巻

海鳥と鴨のあやふさふさあやふさふさ

焼りて海のあやふさふさあやふさふさ

沙漠

栲波むしりあやふさふさあやふさふさ

曉臺

すゝあゝ人ふぬくはりけり
神木の屑をまきくむ半簾
老馬やうたふ白萩のうけ
七木の鉾のさひするまうら

訪隠者

差鴨のそく水かゝる鳥うま
水色や汝住江地ちうくせ
夕月おむひて鴨の泳けり
水色を鳥尾吹木を日枝り風
水しりのあふらうむ嵐うか
鴨うてほのくくあふちん水

批七於初下九

うきうもや我男小射高さ
ぬまうて沉かぬの浮寐色
水しりや小笠かくまの朝日
うつらやたふくうく人の影
あふあうきまも流るる霧か
からの子ふまふ海苔かゝる破き
居るすまふあふ居たり暮の鴨
夕川やのあう小鴨ふ暮のうき

冬枯の巻

信まはく枯く解うふ舎うか

漠

全

臺

全

墨山

岱青

嵐程

庭雨

帯梅

延至

曉臺

青霞

沙漠

士朗

岳輅

昆明

紀鳳

白圖

世を蟬よすささくゆくんをひ終
冬を終うくあ日板の種終るを
むしろ戸せりあうりの冬終
萩ふんふん終る終る終る
二三日ハ二掃本志くす冬あきり
冬あきりす冬あきり冬あきり
山の奥あも田一枚あもこきり
は奥ふんをすすくや冬こきり
或人の油くきり冬あきり

閑歩

一体の哀痛とりんふゆこきり

曉臺

岳輜

龜六

士朗

昆明

山嵐月

羅城

兎石

北橋

白圖

批七於初下十三

わか友間毛致仕て後花雪月のみ
よけうろ湯て葉と葉をるる
たの甘豆が
五月桂戸所の奥けりふゆ終
嶺、藤のすき
たひおすも和みす峠迄の夕陽
市のほありのうこく埋り人
歩り人あきつげりあきり
ぬもあ葉の日冬風終あきり

賈文

文一音

三岱青

田大

山市

昆明

曉臺

明

八月十四東湖上を歩く

花をたもつと志きりるり波の程

白圖

春のたひひ草の程をたもつと

玉屑

ワウ詠ハクふをうきり北の子親

仙布

一日新たひや中詠ゆり秋の心

魁門

春風におよふたき砂のあひ

一音

批七初下三

九月十三東湖上を歩く

花をたもつと志きりるり波の程

春のたひひ草の程をたもつと

ワウ詠ハクふをうきり北の子親

一日新たひや中詠ゆり秋の心

春風におよふたき砂のあひ

大岡寺廻りにて

吾を歩くのやをみはわくぬをうけ

るると吟

るると吟

るると吟

るると吟

るると吟

るると吟

るると吟

るると吟

るると吟

るると吟

白圖 玉屑 仙布 魁門 一音 賈友 曉臺 少如 巢居 桂五 岳輅 沙漠

其の日に於てうつくしや石部山
 虫跡を尋ねたりハ高き山の上
 松の葉の落ちるやまのけし
 片淡ハ清しき身のうつくし
 若松山をたぐりて高き山よ
 のりりと松房州を名りて
 閑寂又たくひなりて後半和尙
 用基といふ
 後半をたぐむ蚊をききし山の上
 蚊居の跡にぬきおも枯ハまみなり
 爪買てふふ良の七糸をええなり

士朗
 巴江
 物哉
 伊奈支
 大阜
 昆明
 聴吳

批七初下十四

以の菊をたぐりて小つふり
 うつくしや毎夜をたぐりて蒲團
 子東り東まふりて多侍といふ
 道り事りて
 層のたぐりて一まみんて物色なり
 わりてたりや字跡のたぐりて日
 年をたぐりてぬきおもて高き山
 川尻をたぐりてまみんてり

同 非如
 桃生
 士朗
 紀鳳
 紀鳳

楊柳をうくと枇杷の花ちりて
夕月の連歌を書き合へたわく
盃にうけてあやうむ之日の月
士朗 鳳

常子將也の軍

人ハ以テ魚ノ水カ
昭雪の人おも年の名跡ノリカ
火を焼く年を懐む沖の舟
年の日暮をしく春又お母しく
はりたるう年も川や岸お戸
をいめとも月お添く年ハ雪お亮
羅城 閻毛 騏六 臭日 青阿

批七於初下十五

落る齒の初て年おをき川
似合いや年お人の革羽織
煤拂いより梁高く見ゆら
くま井の菴ああから煤拂
年おぬねを角力のあまひ子
年の市人さけり牛一の尻
年の奥又けりゆうもこの奥
新年おりもこところりよ煤拂
燕の巣をいあすのあすく排
人間の彩色元て年のの毛
暁臺 沙漠 徐英 圃曉 士朗 卧央 丑寅 蛙聞 賈友 鹿門

嶮嶮小紅人ハ掃りり年の暮
年もつや日あり月あり天津ノ
新卒や人も落つく終天の暮
年の暮梅の月間を恒居外
おしーろく又たり梅を陰夜毛

里采

岱青

紀鳳

岳輅

昆明

暮雨好書

笠寺やとぬ窺り暮りの
あちろくと梅の花
附志しぬを移ふるつえ
人きやうと暮をゆる

騷六

士朗

満子

批七於初下十六

月此夜おもき満園小月見もハ
兼花をりくおあくと一陽

六

朗

山居

梅はくらく間を暮の
暮雨や山のうらまえて月よさ
毛花魚のうらまえて月よさ
暮雨のうらまえて月よさ

岱青

岳輅

物哉

羅城

逢坂を離る日

ちもの面半の顔を流るる
暮の面半の顔を流るる
よく笑を暮雨の降るる

桃睡

庭甫

越毛

二日降て暮中ぬのらう郡
幼子の花中存ひや暮のる
梅の木の手くくさふぬく暮のる

騏六
士朗
大年

龍麩山

暮ぬや葛菜新枯をぬふ日ハらく
ちりさめや夕日ふうらりり炭
けるのり免よく足むハ後押全
暮ぬや朽葉ふぬぬ新田川
暮のる松のあゝみ松やある
けらぬや枯木のよを降ら
暮ぬぬの果るまよ白銀の雲外

玄く
閻毛
昆明
圃曉
蘭水
曉臺
雨曉

批七款初下七

水霧のせ
各鷄啼と人のとけ帯修玉泊
ぬ降疎るうの花の心
露の束新色やよくてきぬら
朽ぬり且に眺のひらいす
暁のほをうらふふをぬら
白濁する折一葉新川
女郎花新雨神をぬきくけ
中ハ晴風破るつぎなり
うき風のちも以返に帯の帯

閻毛
曉臺
閻毛
全
毛
全
臺
全
毛

母みくくまて魚くりみゆく
 七五三切くハ核の本の神罪すん
 明智ク名跡屋敷七五
 月のまわつまふ飛鳥のあわり
 灯つきゆりあをくちんけん
 羊儀神阿らくお守貝吹て
 小神まめたる僧衣なり
 花笠十日も赤のたぐい
 夕汐さのり厚魚物うゆ
 砂るあふあふふるうくまき
 入ふハはくく車をりりり

毛 臺 毛 臺 毛 臺 毛 臺 毛 臺 毛 臺

此七歌初下十八

神の鼓の音を
 構の火をく目志ろく
 雲霧の半そまのむら
 せんすくまの帰俗あまん
 吹磯磯の藪の蔭くもり
 縄つけてわくく櫓のうき板
 門ゆくく水も汲すく水鶏か
 作向て鳴くくあ鶏も年のこと

白毛 全 臺 毛 臺 毛 臺 毛 臺 毛 臺 毛 臺

楚分 關更

水鷄啼り東八高雲よりの川

岱青

醒井みきり

多鷄はくちくくか海まき流ぬけ

帯梅

水鷄啼り夕ふちるくきく

騏六

白妙やまふきとて啼り水鷄

五周

豆の多鷄尻あそを白き海外

兩滴

水鷄啼り井の中川水く

青阿

多鷄ちくく若くききり妻との

曉臺

二人と八人まききりのを啼り水鷄

紀鳳

啼りや免は多鷄をえりちくく

士朗

水鷄啼りや煙の引くく

白圖

批七次初下十九

佐屋の泊み

舟中福てば多鷄の舟たぐ

幹亭

池のめくも又降るや水鷄ちく

間毛

大風のうくくちりてな水鷄

桃睡

むらむらふるるとんき水鷄ちく

物哉

鴨の春

刈あそや

早稲あそりの鴨の春

十日あそ月の光る柿枝

計之

落る齒をつむ袂ふあふるを

士朗

ありの賛

略きて善りし星のたもと外
ひんくと略のまりし毎日う南
時多や田縁の略のそりき
捨少松略のつりき並ひりり
竹垣の併くきりり略のきり
略之ややくてあけきり是のあと
あちよるり略のそり海濱りり

關更
青阿
万岱
梅虎
昆明
羅城
桂五

三日月寺にて

批七初下井

略きて星の二日月を月たり

夕宜

回

月落るいよく略の夕の南
略啼て雲のなひあるふもと外
月出く略のそり水のすりり
夕暮やそのり斤も略のきり
略啼て舟の夕飯るふりり

之楓
雨曉
南溪
米汁
騏六

草菴の巻

粟稗ふそりくもあはは草の菴
秋のきりきりむらむら

卦央

長閑さや卯朝青海庭をくり
啼ぬ時ほくひんえたる雉子
志し林ハももあき枝新あけ
吾朝の松を忍び居る師走
閑口小松笠ひろふおし
きりくは鳴や萍のぬきさけ
題画
養中の様急しと啼りさるうも
沸しゆ小蟬もわたり菴外
口の若の梅ハつさくうまの衣
春さとし海苔橋あきの落月夜

帯梅
京百池
満子
騷六
木鼻
圃来
入妻
羅城
暁臺
桃生

批七次初下廿二

夕鳥や遠海つらとの菴ぞ菴
萩咲く蛙掃出は小庵外
麻鳴りて志をり入下り山家集
月夜
亦月の巻
るやあたるたふあも何守三口の石
アウチのこのろかあさうりなり
ひよろくと小豆めさとの米布
死てあきま山家集
梓よりあつらきろ弦けり
ふふそと年ゆらる魚さ

信室
巨川
也梁
山青
東遊
羅城
暁臺
城
臺
城

林卧

萩萩やろくしちもきりー二日月

二日月後の波あそぶるうりぐり

三日月の雲のまき合ふ光斗

三日月ハ玉のかかりすうとけ

根をりま引ちあハ夕月候キぐり

月落ちてやすこ音るうろ果なり

響のきり月のくまきあふり外

林臥茶のぬき産のたのしみ

あそびーくろえんぐきハきりー

士朗

羅城

騏六

煙夕

卓池

岱青

桃睡

批七初下世三

杉影のちや月あそぶ者あそぶ

暮ぬ更ふりせらむそそあは

二むうやそあみあうたの月

月あそ中ふとの影あり淡路語

月あそあふらふ小車のはさの上

松ふりけつを流しつ歩り月見外

月見まハ悲し古人と月あそり

平うに後ハきりやし杖の月

代くふ見り人の泪り月のあそ

士朗

南朝

岳輅

吳井

岡毛

満子

岱室

五周

白園

行くて帆送くくんふの月

素光

月あふるくみゆきくつ月

青霞

さやけゆふ雪の取りをく月

逸漁

秋夜夜ハ月うもく山嵐

桂五

風を秋とくくして月をひく

卧央

出月や海へえやあく面

蘭水

琵琶橋

月出で橋あまをくくり

万岱

月のあふるあま枝の子規

南陽

秋閑然

おもひあまりて月をのくと秋ふり

撫松

批七初下廿四

懐く月のさくは秋能くか

大阜

星をいへく晴きい急く後の月

芦涯

后秋月長きいあくの余り

夫芝

ひくくく雪のあふるくく

おもふ不幸はむつすき人の心

あふるくく雪のあふるくく

く雪をむくくくくくく

おのくくくくくくくく

月のくく果るくくくく

名跡をくくくくくく

一入おもひ入くくく

くりたりりめらきと同一命して
又は姑ふあゝかりあゝもつこ
なき命とておとほはさりたり
おほくはなきすとてんく月を在

曉臺

寛政五年十月

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

批七初下生

口笛集

蛤もふ尔口あゝ法りか
之橋より中もあゝきか月の旅
る時を吾あゝの空おん答を
土橋あゝは嵐をりりま
淋しきおんあゝをほとくこ
岸四子本おををくみり
山鳩のおもくくは鳴り古もの上
下弦をぬくあゝ橋は通さん
を付弦やうを教すも柳子節

竹有 美 士朗 沙鷗 月底 對我 青峨 朗 大有 元美

火うけれ多き七夕の宵
 芦の葉の月さやくと川風ふ
 結田の木末春う菜より
 望の音の秋の自ひを吹免て
 むらゝ思ふの妹うばの
 うき人の眠を斬る雀
 竹をうらほの末成る粒ひ
 陽を肌を脱する併た虫
 板戸の飴のとける妻の日
 焼草の葉のちをさそを初越て
 おろすをほる伴笑の志ふ

永齋 大巢 底 交 明 有 美 齋 巢

批七初下共

蚊ひとのみたき破る銀葉
 宵の水鶏の音のあかり
 二人すて今事かりお来る麓さ
 ふやと云出は山伏う 事
 松風やさすうお婦の持不
 あろのたぬぬ朝魚の心
 おふくをり月も泣せくら
 神おほくくくくは 席 箆
 葉物を足透はるとおを付て
 うきよの中をぬのるく
 ふもあうく人のふませぬ落畠

底 鷗 巢 齋 美 有 朗 峨 斎 底 鷗

花の戸口をひりく〜とあ〜
そ〜ろをりりふふよむ春の香
風呂菱軒一蒲公英の家
蔓子のうら〜の里ふ母抱て
あのみ〜の朝日あつらき

我 嶮 齋 巢 美

竹有 四

士朗 四 青嶮 四

沙鷗 四 元美 四

月底 四 永齋 四

對我 四 大巢 四

一紙七初下廿

いつ掃たす〜そさ月のるの庭
雉の浮巢をつくる喜 草
遠衣あ〜柳を望ふきて
春の名跡の耳ふ蓋す
有明ハ露の〜〜生ぬらん
飯の御門ふか〜家牛飼
不落の美系を吐ふ〜目又張て
木をきり〜〜け〜け一枚
年の貝大和平の薄くも

鹿野 山 士朗 黄山 岳輅 九岳 野 朗 山 格

雲の袂のやみろひをぬふ
湖魚の花より秋を足破りて
小町うとを七夕結月
玉むしハ霧はぬきたる唾羣
若さへ粟舟のこりの下水
菱舟又一吹風のうらるあり
草鞋いくらのり居の巻
明る萩の花は小空とき菅葉け
葉つともあふ外の中こち
僧正のせき色の烟を誦やり
何を子猿の叫ふむく

岳 野 朗 山 輜 岳 野 朗 山 輜 岳

批七初下坊

瓢箪の尻も長くぬ籠のせ
人まはせう忘れし字をる
春の河は言あやむらん蟹牛
釣籠の縄のぶき世の中
秋はこゝろのへるはくまきたり
屏の鏡の禱 恙そある
鳴り座もをつき印の松の風
芒由りき秋の一草
雪もやまき年ゆく里の麦付て
おのやうなる 鯨まきるすり
をらくとけりお若の竹口り

野 岳 輜 山 朗 野 岳 輜 山 朗 野

外をきくうる雉の山
葛城の神の終るもまきて
あなをの白い神又あつまる
新のま娘さうある書物
いつも日の出の子まきる影

朗 山 輅 岳 野

鹿野八
士朗七
黄山七
岳輅七
九岳七

批七初下光

月いかり日あつるあめ
焼うまぬいさをうかりけり
葉菓賣を道の枝折り山越て
火をうきける笹外あめ
うまのいし竹事をきん初時あ
あをりをよあめ
あつるあま書う原うま書さあ
いつかあつるあま書鴨川の水
誰んう板の枝をうきりあ

五道
朗 山 輅 岳 野
大蘇
雨節
野秀
湖風
左雀
浦豆
珉屋

君の身を来 免々 なく
 風のふくたむく 物をふふや
 ちきまき 衣日 目くらり をたそ
 志書よ みる 明く ころさ 轉
 杉のつら いら 蜂を 遠せらる
 蜜の子と 蜂も ささめ ぬ 末葉
 梅のよひ 花を 集るとも 大
 いろく の 花よ ちのめく 花のま
 夏の 詠り 燕 の ななく
 江の上も 人間 ぬ 日ハ ちり ぐり
 いくつ も ななく せ 産 桶を かく
 朗 道 屋 且 雀 風 秀 節 蘇 朗 道

批七終初下三干

夏利 小 芝 居 を う け る 麦 の 中
 鮎を漬よ 物まき ころころし
 大 世 ち ち り の く 男 の 罪 あり
 意を 撲 を うる 舟 残 押 出 以
 松 風 糸 流 ぎ を きき 事 を 喰 ら せ
 経 ぬ 様 の く め ち ら
 半 部 を まきの 糸 の 伝 又 明 持 せ
 足 糸 糸 を ぬ り 結 せ せ ち ら
 高 川 の 錦 を 三 四 杖 乃 月
 酒 の 口 ち ら ち ら の 初 居
 う き 人 を た ま ち ち ち ち ち ち
 朗 蕪 風 秀 屋 且 雀 凡 節 秀 蘇

少くや又あら 門 終 雪 早
 取 寄 小 西 日 終 雪 早
 葉 多 く 煙 波 二 横 たる 小
 小 篋 ぶ く 後 ハ 云 ず り 取 寄 下
 凡 中 を 追 ぐ 所 り ぐ 三 子

道 屋 風 雀 旦

五道 四
 士朗 四 湖風 五
 大蘇 四 左雀 四
 雨節 三 浦旦 四
 野秀 四 珉屋 四

批七初下世一

時 魚 暮 れ 移 州 萱 の 表 あり
 葉 の 木 細 の 花 を 心 づ け せ
 旅 亦 改 善 ハ 比 け り 物 と 連 ぎ せ
 笛 吹 け 加 へ 終 袂 更 け け け け
 ひ 大 く 一 と 月 の 涼 多 く 山 川 小
 麻 小 木 ぐ ろ け け 麻 切 ぐ ろ け ぬ
 さ い づ ち の 寒 ハ 葉 子 も 葉 子 ぬ
 心 の 底 了 ち 年 の よ ち も 終
 曙 の 抽 け ぞ の 噫 又 寄 け あり

圃 曉
 士朗
 硯 静
 野 喬
 周 瑞
 楚 江
 雪 橋
 白 慈
 大 清

志ききりきりいふの神、
 ひききりきりいふの神、
 松ハ涼、き銀屏、
 灯して喜似て、
 何ぞよて、
 存命て、
 朽木のや、
 ひくくと、
 手筆、
 可脱、
 う能、
 静

批七初下世

ハ重むく、
 灰りき、
 喜自、
 朝日、
 乞食、
 不、
 故、
 さ、
 い、
 鷲、
 くら、
 青藍
 朗
 曉
 喬
 東
 左
 克
 茂
 瑞
 江
 藍
 橋
 清
 踐
 谷
 之
 龍
 曉
 喬
 瑞

岳輅

すゑやをりふふ仲ハあつたや
花時鳥 月 雪の 寒
大船の浮出が波のまじりて
そよ吹たくる 杖のきりく
いつとなく山家集よむきのあ
おやをかりり一蕨の實をとる
松の木のうもり拵ひたる夕戸舎
旅の河をまきハをりかりり
叩とも押ともぬね瓶のあこ
露りりりともく穢かろよよ

士朗
松菊
阿城
大商
吐山
昨来
橘良
竹堂
駕風

枕七初下冊四

落くはく朝日よむる辰うら
意のほくしぞ柳引けり
舟りうらむ拵女の海を去の水
をさきせハ逝る 花 髪
伝ふの村ハ何ぞやう物やりを
暮うちう来たと螺の貝ふく
夜の森の深きを月とあやん
萍のふふ似るものもる
ちをくもる峰の梅の里の西を
志をくしあををとめる志く砂
世の中ハ修書のうらむうらめく

金谷
輅
朗
菊
城
商
山
来
良
堂
風

箕も亦のち色うこく 曉
 雲助り糸のまぶを覚ん 指へ
 岩のくろこの水を一口
 むろくと降来る面うむる
 石燈籠へ火を指てり
 敷は蓋の後の跡る寺の庭
 字の枯葉よ字音を結
 百姓の粟葉賣さるる月の
 板戸のうくを歩ゆ人く
 赤の葎ハ葉もつすぬ篠ふきて
 糸を生きたる池の水音
 谷 輅 朗 菊 城 商 山 雄 良 堂 風

批七款初下五

空の亀のあやふうる五日
 花よ葉つく男背 くるき
 色の洗ふ椽のせんを 萱字
 杉節ろよすする 薪ハ何く
 谷 躬貫 木天 雄

- 岳輅 三
- 士朗 三
- 松菊 三
- 阿城 三
- 大商 三
- 吐山 三
- 竹堂 三
- 駕風 三
- 金谷 三
- 五雄 二
- 躬貫 一

昨来二 木天一
橘良三

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

批七初下廿六

蘇峰一 来歴三

をせ紙着

紅梅やまぬ多つくる 玉簾
 少もく火のまきすきめのみき
 猿橋と月のあつたきよき
 ありまの好む西の山
 鳥の尾をまきおきく放す
 戸をおたひすお付ぬり
 一日の雇をんと出たりり
 宇治へもつくりし 舟
 古言をきけ八洞の山をきく

土郎 岳 兔 大 武 嵐 駄 洲
 郎 輅 洲 阿 三 峰 六

春日遊あそび

花莖健ふハ水のなりりりり
秋の東の足ら車しらハ窓の月
夕しらや雲の機ふあうし
井のふや路通り 蔬まうし
白ぬよ木のけりしをる小僧
鳥のむてほめ守梅のさうり
やうくの時面ふらむ数木
おそりともいとく月もる庭
夕鳥や屋ふをふくあう井尾

墨山 田央 桂五 竹有 卓池 柯亭 楳閣 柳涯 清門

批七款初下冊八

春風や雪海の所りの小杖賣
大年もかうハのそり花の糸
あうよまきまのよ地を吹花の葉
下友ハ父も花のすしめ山
夕られハすのうき猫のこゑ
風や障子よりる竹すこき
名月やおらきとやる菴の犬
三日月を何處へやつたを深とる
明やのやさうし小動く人の新
百姓の飯付るを復あの日

雪洲 方明 湖風 秋奉 佳雄 田江 士峰 常梅 魚来 桐屏

新法師はとてお八家ハそくす
 妙くまのつとてはまのつとて
 嘗ハ悲ひ上手よ三日の月
 花の沙汰あくてさる不二の山
 却とすくく花鳥ふあま山うた
 夏の月ぬきさるもあまきま
 蓬の主人菴で朝飯食ふり
 かへあみく雨のわらんうか
 海丁とくふくを思ふ山の上
 毒の風初つり来る塘うか
 くるふふ笑ふやうや不二の山

月底 珉屋 東陽 千阿 古東 菊分 得之 東暎 大商 茂龍 菅茂

批七初下卅九

湖を象意よせん夏の月
 香の末で松の葉むむる小春の
 白きく小杉深る葉はなかりなり
 刈秋や人おもすくも葉の蔓
 宮崎や舟お来て鳴鹿の音
 今ききくう啼とハ月もをを出とハ
 するめうむ思のたるさよ毒めめ
 浮出さる月あまかくは陸うか
 嘗よ詠むるあまハ隣やらう

病後吟

蕉角 白慈 大阜 硯静 金谷 留子 吉甫 橘老 九兵

そらうき月小丸つく歩み外

騏六

名月のあまひわくへ鬼尾

圃曉

のつと出る月いと骨の阿比

野喬

子を連く煉をきふくる男分

岱呂

お物もいうふゆすきハ花うぬ

竹田郎

常におもひもすぬ篋の高

東水

樹ハよあ又外ハましく日暑

秋鶴

糞汁の供なくいせ小所

五道

仏あし積る日あらしん手移渡る

夢阿

女昂花絶の夏あま名やしくん

意逸

批七初下四

推けおやおれをけしたる葉の烟

栗大

音あるや雀啼りあふまなく

求巳

掃よせておまひあらん宇治の糸

駕風

あかハそハよきるをど雛のあ

我丈

あめやうか戸のあく言よま月

大蘇

月雪のま衣中し似くり喜月

應亭

おもしりまきふこの名ふせん喜字

素剛

一帯て何れもすむやとま

太清

と皇鳥や字ほふ持るるの昔

秋國

喜う寸まほやくうこくまあるは

浦旦

茶峒多すりあまて拵ふらそや
月ハ丸う柳ハ長うをりふやり
夢ハ風や梅津の里の朝 朗
川舟のひとらとけきり夕霞
湖を木の百ふしをり梅の花
松うけを梅屋よけりこの世の月
放しやきハ大粒ふをり堂
あきまきくよあてもつぬ水
伊勢笠や生海風のこる年忘
鴨一離れ多水水のさきりき

新記

東

批七初下里

木容

沙鷗

周瑞

虎更

魯翠

論草

木人

永齊

左雀

五雄

風ふ人もあつれまの 菴
おもしやや毛堂のうし梅の花
笑ふ門へ福りまめをよ梅の花
大津繪の鬼も眠る喜の風
さしーさや松うし松へ虹うしつ
雨のふふ喜を押し多鳴り蛙
豆魚や塩屋くのまのり口
杖の束ハ月をちうふくしり
夢のよあやわか人も人よ眠る
けきりさくくよあるそ志賀の山
二月まであまはむく梅の心

松菊

深柳

櫻

青峰

士龍

棋道

黄山

蘭圃

桐君

左谷

金陵

夏の東ハ秋の暮るひもかろる
 旭亭
 秋菴をいつらハ秋ハ出てり
 竹趣
 菽寺ハ海人のとる但槃像
 士朗
 月夜をく猫又小判よ時鳥
 元美
 ちるさくらハ秋の一本のさぬまて
 松巢
 花ハ秋をよけりなり山 楓
 素兄
 白きくハ秋の獨又ハ秋まりなる
 野秀
 鳥少色の喰せてやらう秋の言
 駄六
 月宮の松ハ秋の涼のめりハ
 青霞
 ひらつハ秋の暮るの上も枯れハ
 阿城

秋七初下里

鴛鴦を放さハ秋の湖
 野乘
 け林のさきハ秋の菴り
 柏亭
 十六夜やうけつりたる山の上
 棟堂
 世間ハ秋の秋のふハ秋の
 舎童
 秋梅の枝むつらハ秋の山家ハ
 只白
 菴菴咲ハ秋の秋の秋の秋の
 里有
 鴨川の水の秋の秋の秋の秋の
 對我
 ささきハ秋の秋の秋の秋の秋の
 斗表
 菴咲ハ秋の秋の秋の秋の秋の
 史角
 喜ハ秋の秋の秋の秋の秋の秋の
 武三

之か人ハ一くせめりよ花の山 墨雄
 まくーさや人よまきたる石の角 九魯
 鳴り水鶏 夜ハ下 結をくを不
 暁やせせし仙をよす一
 山鳥の妻よい落せりき
 音よんー月ハ卯山よ揚や雀 楚江
 十月や菽の中うー不其の山 芳水
 さひーくや里の中を枯尾志 平齊
 夕もえち 杉ハ丸菽の忌をり危 佳長
 秋鳥の決 廣よ明云よ水の月 雨節

秋七初四
 五

花の介よちり介き菴 有磯
 春晴るやつるもほねるかうり志 午風
 毒物を小月日のけやーうか 杉燕
 一いつねよるつくと小倉城ハ 啟甫
 名月の月ハめてをー出は々り ^{十ヤ}冠四郎
 麻鳴や砧をうつやーぬの月 盡月
 朽りる時ハ花ちるやうよひをり 如月
 小坊之の年うー山ー雪の朝 吐山
 中宮の舞葉よ交る落葉ハ 友鳳
 来てーこをうるや秋のそいりハ 沂遊
 花雪り子を存のを踏か角カ丸な 青虎

低くくはるくくはけ山さくら
 よい月や月の兔のうた笑うん
 日のくけの小笠よ跡る枯竹式
 家社のゆまきつらうきさか
 風のあかも月の志はくあり
 秋の風雀をたてて放ちけり
 蜻蛉や飛ハ火ともはるの上
 松明てけし名おほくく
 春ぬや小貝しつらつをく
 雪櫃を飛ばせて鬼のまくらんか
 今又又芒のうへに家敷りか

二九
 可竹
 竹堂
 斗石
 葛齋
 蘇下
 吐月
 兔洲
 松菴
 朱鶴
 梁臺

七月初下置

名月や雪う小あもあもく
 煙火をよふせ鞍馬の番おろし
 あとも奇々小月られてまくら松尾花
 風や伝をけり雪の山のうへ
 ときりしつら小笠おもすりや跡押
 いやるまき雲より月の白ひけ
 松風もやんて巻ぬの雪うか
 さくむく山ハ不呂て杯を像
 名月ハ只山ささとよ

其中
 雪封
 株洲
 橋良
 里桐
 草人
 可玄
 雨来
 和樂
 丈阿

初雪や鳥の食やと菓を荷て
 雨の日小生あかりり苔の志
 小夜文て梅の中ゆく月よ小
 秋の雨ふすはりくさき小夜小
 うらやい雨の時文と茶をそそ
 寒月や雨燈の波をちくき
 松風やう水来の文の時鳥
 いらるくやうけのゆ竹の中
 北八山南ハ海を天の川
 谷の外の木ハ橋下そ神楽山
 雪をそし二夜火ともす名神楽籠

躬貫
 蘭谷
 乙牛
 嵐峰
 かつ
 楓江
 霞洲
 葛井
 鹿野
 得舟
 岳略

拙七初下四五

文化六己巳秋

蘭書懐紙

河豚喰ふと毒れ、珠の学書は
ぬきん長きつら目なること月
山本の土よるくと光る風をえと
土器作り、香の都、舟、
有り、舟、福、毒、龍の古、
家持、毒、毒、毒、毒、
と、毒、の、毒、の、毒、
銷、何、よ、を、ふ、く、人、あ、る、也、
朝、鮮、の、史、と、つ、ら、ふ、毒、玉、寺

白鳥素式

士朗 桂五 岳略 他郎 五郎 朗 務郎 朗

蘭書懐紙

批七初下四六一

落の望出に加減さるる
 亦ふも又宗旦振つみかつり
 とくもあきほく風くわく也
 さく矢射るもの毛の蒼蒼
 酒屋のうら枯柳見より
 也ふ山平時ぬよ厚結啼くられ
 及舟さびく漕つまよくく
 のくくく梅のよ買々年取て
 さのそらめはに正月の月

郎 格 五 朗 落
 同 毛
 五 周
 亞 滿
 白 岡

批七初下奥

春の風弱の吹よ向ふをり
 賣らるるハ伯父の
 はまぬけ小侍多し明也ハ檀うり
 松崎の落るほくまの
 忍ひ合ふ花はりく異々白接ぎ
 あまりの確むのふさくも
 尾羽坂や暮る風くいふ不
 挾豆のまて 豆と
 胡の月半りの暎濃きあろ
 松板屋を三井寺の秋
 こく酒買よをりく垣絆く

羅 城
 毛 周 滿
 城 岡 滿 周 毛 城 岡 滿 周 毛 城
 城 岡 滿 周 毛 城 岡 滿 周 毛 城

難ゆいよ志うくくくをり
 すけもるまきむ笑いなき雪も
 古榎の木の子のとりけし
 かけろふの講くつる誓のき
 琵琶うきあはれ借の悪病
 何くも木の明もなきし
 杯の花をる四月に
 魁て杉葉をぬきり嵐山
 おきひ久しき死場さめん
 像鏡を現ぬくさうち詠め
 山陰のあふよめ

毛 芥水 夏畦 岡 満 周 城 毛 水 畦 岡

秋七歌初下栗丸

胡夷すも 菊も 葉も 海白
 何よさくきてる片ぬり
 毛食のむうしを語る杯の月
 夏洗の中へ 落る 杯のま
 齋屋く門田のあつたわし
 漱くあふよめと 臨終持てあ
 入る年ののまをけいま
 毛も 持出に 嘆きの 鐘
 海山 海やうの 海を 海
 新は扇のまを申す

満 周 城 毛 水 畦 岡 満 周 城 毛

秋七歌初下栗丸

雪のやみ坂あをまらるるの 面
花すき録さしけぬは 月
しり舟の能く舟家の火を焚き
桐のまゝ木のあつて形さしり
群明も祐くあつて西の山
小舟のそけは端端を 汲
あしうくはまゝ根の後の出まて
傾城かりしるるの字を 記
明早やまは定めのあきたる書
あき書さくく 漱まくくゆあり

桂 東
狙 乃
士 朗
古 戎
乃
東 稗
明
戎 稗
乃

批七於初下五十

志ん寺の男お人よ酒の免ハ
向への雪流大い吼つり
る明ハそ達の流の白木槿
何々流くもこれお流の秋
天神の音居より流居の糞
まはれしりしち刀の番はる
已く助くまうくふくり花も
小船の現おるし 里

朗
戎 稗
乃
東 稗
朗
戎 稗
乃

白芥子のあつき方や竹の心
 二三日とあのふきし水時
 古川や竹のうらちうらち
 鴨牛や志のひ男の志力の
 こうじ軍いすれまうく
 席一さようあつき橋の柱垣
 伊勢のあはれんく富を
 むんしつ船の機ろ子やせられ
 魚けろひ酒飲つらゆきを
 道あるし

七初五
 七初五

狙乃
 石岱
 五周
 同毛
 曉臺
 桂五

けりて海は遠く涼り分
 秋火燃く水は絶り春の丁
 夕暮あつて雲の四隅
 片をりおやあけ時を月夜に
 魚物りし海うらり林の面
 水鳥を行よまより日暮る風
 山麓のあはれりり浮藻草
 凍露や衣さうり古
 一くもあつて雲の甲
 兼ありや眉をよかろ雪の
 月影や竹の月影を輝き

羅城
 紫水
 臥夫
 岳格
 亞満
 葩香
 岱青
 桃明
 少如
 午窓
 桂裏

秘事の陣出くしつゝ空をく
明月のうきく人思ふ水のく
梅の中よふお梅くさるる風あか
まろくく風の海まの生海風か
雨あしりよき交りたりこそさくわ
やうきくおのまふ想ふおあ
蟲のさき終ふ海まのあし
福山の柳よりより夕ぐれ
常ふおあくくお日のおく
川風の吹りすりたり小春 猿
ぬきおけりあきるをりなきおあ

綱女

粟雄庵

松島
文芸坊

東壺

亜満

白隠

豹門

京
百池

士朗

岡毛

五周

批七終初下五三

白魚の青魚を透ひあらしめ

曉臺

予蘭盆會

あゝ海へさけとられたり魂よひ
秋の會おれ子半部くくお免
大井川今おまぬ喜あし
啼ぬ踏のあまうつゝあの方か
山梔子のむ捨ひつゝ小あさ
あさうつゝ代大名屋の石燈籠

越
賦原

桂五

羅城

岳格

他郎

白隠

善の多む蒼又ち雙師の母尼を
すく家刀自の侍養は
福もあふなり以刀自は
福より味えたるハ尼は徳は
れは法にてもなる縁小は珠ハ
兼は心もくはけふしてふハ
陸奥の悪方よむ勢ひをくハ
頼経ふの書筆の芳ふなりし
夢を語りたりをむしむるハ師の
旅を語りたりおろしむるハ
河をりふはしむるハ

批七初下五

刀自のふ素、系曹をとひ
海くも青葉の枝を 古中への
海を物種も打きくゆるハ
尼公もくもるハ 尼公ハ
見えぬハ 例ハ
あつてハ 二云の事ハ
すく 師の懐神ハ
善の多むるハ 善ハ
善ハ

鳥亞満

